

梨久保式土器 再考

三上 徹也

I はじめに	2 沈線文系土器
II 中期初頭土器研究の課題	3 縄文系・沈線文系両要素をもつ土器
III 研究の視点と方法	V 中期初頭土器群の再認識
IV 中期初頭土器群の変遷	1 五領ヶ台式土器について
1 縄文系土器	2 梨久保式土器の再認識

I はじめに

鶴の土器一かつて藤森栄一氏は縄文時代の中でも前期から中期への過渡期が大きな時代の転換期ではないかと予想した。「鶴の土器」とは、そこに生まれた何とも怪奇で特徴的な土器に対して、比喩的に与えられた表現である(藤森 1935)。そして、現在独特の響きをもって便宜的に前期から中期にかけての土器を指して使われる、中期初頭という表現も、実は「縄文時代研究の中で一般に使われるが(藤森はその段階ではそうした用語自体は使っていないが)、その概念は単なる土器の問題ではなく、土器の背後にある文化の問題として、すでに半世紀近くも前に藤森が指摘していた」(戸沢 1984)ということを忘れてはならない。藤森氏の文化史的視点を含んだ、大きなこの転期についての研究は、実はそれが生産形態の相異によるもので、確かに遺跡立地の違いが時間の差、すなわち土器型式の違いとして現れているのだという実証的な研究成果を生み(戸沢 1953)、そして今、藤森氏の予想を裏付けるかのように、縄文時代前期から中期の時代観は大きく変わりつつある。しかるに、今だ中期初頭の一端を担った、こと土器に関しては、依然として「鶴の土器」であり続けたままではないだろうかという不安を覚えるのである。

縄文時代中期初頭という表現は、文字通りにいえば中期の初めのごく短い時間帯を指すわけであるが、そこに生起した土器の諸型式についてみれば、特に関東や中部地方においては、そこに包括されるであろう型式名は多く、型式内容の理解も一様ではない。しかし、こうした煩雑な様相も、

実は「各地方ごとに設定されている既存の土器型式は内容的に共通する要素を多く含んでいる」(山口 1980)という指摘にもあるように、研究史の混乱をよそに実際はもっとすっきりとまとめられるのではないだろうかと、該期の土器を改めて見直すことによって感ずるようになった。

折しも、筆者は先に岡谷市梨久保遺跡の報告書作成、特に縄文時代中期初頭の土器をまとめる機会に恵まれ、中期初頭土器について考えたことがあった(三上 1986 b)。若干の研究史をひもとき、梨久保遺跡から出土した土器を見て最も感じたことは、梨久保式土器の設定された当時の型式觀(戸沢 1951)が、現在までどれだけ正鶴に理解されているだろうかという疑問であった。一方、極めて单一的な型式内容を示す踊場式や、型式内容のはっきりしなかった五領ヶ台式は、時間的な、また系統的な吟味がほとんど行われぬまま、型式名のみが先行してしまっているのではないかという危惧をもった。従って、報告書作成時には従来の型式名称を一旦白紙に戻し、再度梨久保遺跡の保有する土器を觀察し、次のように整理した。中期初頭土器群には、文様要素として沈線文を主体とするものと、縄文を主体とするものの大きく2つの土器群がそれぞれの系統をもって存在し、これら2つの流れがセットになって中期初頭の土器組成を成しているのではないかと。そして、こうした土器組成が、梨久保遺跡をこえて広く吟味・検討された上で該期に普遍的な様相であることが確認された時、改めて中期初頭土器に与えられるべき適切な型式名称が再検討されてくるはずでは

ないかとその問題の結論を保留にしたのであった。

本稿は、以後も続いてこの問題を考えるために、他の資料や事例にあたる中で得られた、中期初頭土器群の編年・系統・型式名称、そして中期中葉土器への発展性・継続性についての考えをまとめたものである。

II 中期初頭土器研究の課題

縄文時代中期初頭土器の研究史については多くのすぐれた記述があり(山口 1978、松村 1974等)、また私自身も梨久保遺跡の報文中にその概略を述べているので、ここではそれらにゆずって省略し、主に研究史上的課題をいくつかにしぼって記すことしたい。

縄文時代中期の初めに、ある特徴をもった一群の土器が存在するという見通しは古くから認識され、昭和11年の山内氏の編年表(山内 1936)の中には「五領ヶ台式土器」としてすでに登場していた。これは八幡一郎・三森定男両氏の発掘資料に基づくものであったが、その詳細な記述はなく、その内容をうかがい知ることはできない。五領ヶ台式土器の内容が公となるまでに、さらに10年以上の歳月を待たなければならなかった。「八幡氏の資料は今日まで未発表であり、ここに初めて… 中略 ……(五領ヶ台貝塚の資料を)紹介するに至った次第である」(江坂 1949)という昭和24年の江坂氏の報文がそれである。

一方、時あたかも軌を一にするがごとく、昭和26年には梨久保遺跡の調査報告書が諏訪考古学研究所によって刊行された。そのなかで戸沢充則氏は、主体となった中期初頭に位置付くとみなされる特徴的な土器に対し「梨久保式土器」として、型式の設定を行った(戸沢 1951)。

こうして、奇しくも中部・関東両地域から時を同じくして明らかにされた2つの土器型式であったが、その後30年、学界での理解は決してスムーズといえるものではなかった。

特に中部地方では、中期初頭土器群をとりまき、過熱なまでの関心が注がれた。その成果は九兵衛尾根式・唐沢式・神殿式等といった多くの型式名の誕生という形で現れたが、皮肉にも研究者の意志とは裏腹な情況を生むことになった。「過去に設定された型式が、研究の進展や新資料によ

って実態にそぐわなくなることは、ある意味で避けられないが、該期の研究はこのような実態にそぐわなくなった型式を再検討して問題を解決しようとするのではなく、むしろ新型式を設定して一気に解決しようとする傾向が強かった。しかし、解消しようとした型式は依然として使われ続け、新たに設定した型式もまた実態にそぐわなくなるという悪循環をくり返してきた。」(池谷 1981)という一文はそうした情況を端的に現わすものである。

対照的に関東地方では資料的に恵まれなかったことにも起因するのであろうが、五領ヶ台式土器について、20年以上もの研究の空白があった。この長い沈黙を破ったのが、昭和47年に出された今村啓爾氏による宮の原貝塚の調査とその研究である。この成果は「今後の関東・中部地方の中期初頭土器研究は、宮の原貝塚で得られた成果を敲き台として推し進められて行かねばならないだろう。」(松村 1974)と言わしめる内容と意義を含み、関東地方においてはたちまちのうちにこの五領ヶ台式の概念が広まるのであった。やがて今村氏による五領ヶ台式土器への取り組みは、その後の資料の追加や若干の修正がなされ、昭和60年、「五領ヶ台式土器の編年」として補強されて行くことになった。

こうして、研究の趨勢は混乱した中部地方の編年を一端棄却し、時期細分の設定という点で一歩先んじた感のある五領ヶ台式の名称をもって中期初頭土器群を指そうとする風潮が展開し始めるに至った。しかし、ここで筆者は現在いわれる五領ヶ台式土器の型式概念には、2つの大きな問題を含んでいると考える。その1点は、そもそも本来の五領ヶ台式といわれた内容自体、少ない資料であったため研究者間に共通の認識がもたらにくかったが、沈線文や、交互刺突文によって構成される土器がその主体を占めていることは当初の資料を見ても明らかで、今村氏、山口氏らによつてもそのことは確認されている。そうした一群を本来の五領ヶ台式とすると、それらは例えば土器の系統という点で、または組成という面で、果たして独立した型式としてふさわしいのかという問題がある。2点目として、宮の原貝塚の調査により、本来の五領ヶ台式の直前に、層位的に古い別な一

群のあることが確認されたとした今村氏は、本来の五領ヶ台式土器をⅡ式とし、宮の原貝塚で得られた資料を五領ヶ台Ⅰ式として、五領ヶ台式土器の概念を拡大するのであるが、はたしてⅠ式の内容が従来になく、新たにその設定が必要であったものか、すなわち研究史的に矛盾がないのかという疑問がある(註1)。

結論的にいようと、筆者はその双方共に否定的な見解をもっており、こうした疑問が本論を草したひきがねの1つにもなっている。そしてこの問題の解決には系統論、型式論ぬきにしては解決でき得ないと考える。今村氏のいわれる五領ヶ台式土器論が、今最も進んだ五領ヶ台式の成果であるとしたら、それさえ「系統觀の不在」という指摘がある(山口 1978、池谷 1981)ように、益々前2者の問題の解決が急務となる。今村氏の「五領ヶ台式土器の編年」(今村 1985)では五領ヶ台式土器を細かく細分したが、その反面細分間にはつながりがなく、よってその連續性や系統性が不明瞭で、理解できにくい。系統、型式觀が欠けているという指摘の出る所以である。従って、より有効と思われる系統、型式觀を呈示すること、そして、研究史の正しい理解を行うことが、五領ヶ台式土器ひいては中期初頭土器に対する正しい認識を行う第一歩であると考えた。その後に先の2つの問題点に確かに問題の所在することが明らかとなった場合には、中部地方にあった幾つかの型式群とも合わせ、再度中期初頭土器群に対する型式の見直しが必要となってくるはずである。

この他にもう一点、中期初頭土器研究の課題として、踊場式土器の問題があげられる。沈線文を主体とするこれらの土器が、編年的にどう位置付くのか、そして、一般的には中葉期前半に編年される平出第Ⅲ類A土器に續くと予測されながら、どう系統的につながっていくのかという問題である。つまり、山内清男氏(1937)、藤森栄一氏(1956)、山口明氏(1978)、今村啓爾氏(1972)(註2)等は、踊場式をいわゆる梨久保(五領ヶ台)式以前におくが、一方で、平出第Ⅲ類A土器は、この系統上にある土器だと考えられている(註3)。ならば、時間的に相隔たる両者の土器は、いったいどんな経緯をたどって変化したのか。踊場式は果たして、いわゆる梨久保式にいったんはつながるのか、それと

も独自の系統を維持するのか、いずれにしろ両者の時間は整然と埋められなければならない。しかし、この点については今までほとんど触れられたことがない。いわゆる踊場式土器の抱えた問題の解決は、中期初頭土器群全体の動きの中で把握され、理解されるべきで、そのとらえ方いかんによっては、中期初頭土器の全体像をも左右することになりかねないとさえ考える。

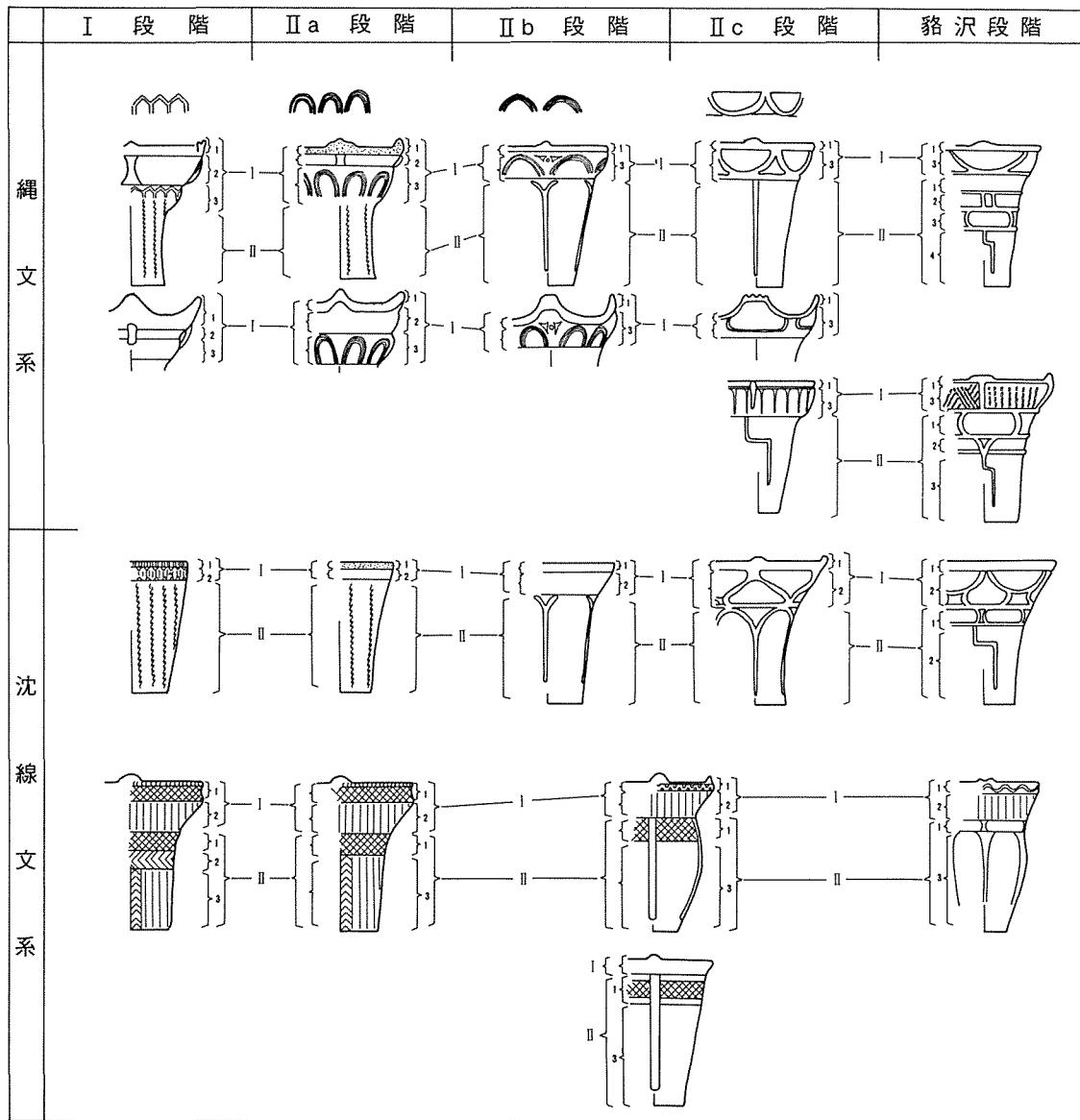
こうした「五領ヶ台式」の是非、「踊場式」の扱いという2点の大きな課題をふまえた上で、中期初頭土器群の再整理を行いたい。

III 研究の視点と方法

前節で触れた通り、中期初頭土器研究は、宮の原貝塚の発掘調査と、今村氏によるその資料分析が、一面ですぐれた成果をもたらした。それは、中期初頭土器でも特に前半期の時期細分が層位的検証に基づいてなされたことである。その後、中期初頭土器全般の編年体系を示した「五領ヶ台式土器の編年」では、その方法論的基盤が型式学的方法によるものであることを、氏自身も明言している。

型式学的方法の有効性と危険性については大方の説くところであり、慎重に対応すべきであろう。私自身は型式の連續性を正しく認識することから得られるであろう多くの情報には大きな期待をし、積極的にその方法を取り入れたい一人である(三上 1986a)。特に中期初頭では「編年の手がかりとなるような層位的所見がわずかしか知られていない」(今村 1985)という指摘もあるように、層位学的方法に大きな期待を抱くことは困難である。従って私は、勿論宮の原での層位的所見を是認した上で、先にも述べた通り系統性を重視するという型式学的方法により、中期初頭土器群の組列を考えようとするものである。

具体的な資料の扱いについて述べたい。系統性ということで、先にも触れた、縄文系土器と沈線文系土器の2つの系統を設定した。縄文系とは口縁部または胴部の地文に縄文が施されることによって特徴付けられる一群である。沈線文系は、いわゆる踊場式土器に示されるような、主には半截竹管状工具等による平行沈線文が集合し、文様効果として幾何学的な文様構成を生む一群である。



第1図 縄文時代中期初頭土器変遷模式図

今村氏は五領ヶ台式土器を述べる際、「踊場式土器は今回はとりあげない」(今村 1985)として大方省略しているが、中期初頭土器群を理解する上には前者と同様のウエイトをかけて整理することが最低限の必要条件と考える。なお、資料の扱いについては、各系統の土器を抽象化(模式化)して示した。多くの個別資料に共通する要素を抽出しそれを抽象化(模式化)でき得るということは、とりもなおさずその系統や変遷が型式学的により普遍的であるということの信頼性を高める指標となるものと考えるからである(第1図)。そして、

そこに付属する個別資料を客観的データの提示として集成した。

細かな点について補足しておきたい。本論では土器の系統を考えるため型式名を一端棄却し、土器の流れを現す時期細分を段階として区切ることにした。細分された段階の記号としては、現在最も新しい、今村氏のいう I・II を用い、その中の細分については a・b・c を用いた。同じ記号を用いたが、内容は氏と異なる部分が多い。従って、基本的に異なる部分をまず明らかにした上で本論に入ることにしたい。

まず今村氏のⅠ式のa・bの細分については疑問がある。氏は、Ⅰa式の特徴を「短沈線文の充填」としてあげ、Ⅰb式の特徴として「細線文」を示すものの、Ⅰa式にも一部細線文があるという(今村 1985)。そもそも「中部高地や東海地方では太めの沈線を特色とする典型的なⅠa式は知られていないが、かわりに上記したⅠa式に並行する可能性の強い細線文の土器が多少知られる」(今村 同)ことになると、益々短沈線文の有無によってa・bと分離することについては説得性に欠ける。事実、この短沈線文をもつ土器の位置付けを、能登氏は新しく考えており、今村氏とは全く逆転した編年観となっている(能登 1981)。このことからも分かるように、やはり現時点では短沈線文と細線文の別が決定的な時間差になっているのか疑問で、仮に時間差があったとしても、その前後関係についての決め手に欠けているのが現状であろう。短沈線文については資料があまりにも少ないのが実状であり、現時点では一時期内の文様のバラエティーとしておいてもよいのではないかと考え、Ⅰ段階内での細分は、とりあえず認めない。

Ⅱ式も問題が多い。Ⅱa式については良いとして、Ⅱb式とⅡc式の場合は、後述するように系統の異なった土器群の違いを、「時間差」として誤って把えたのではないかと考える。また、大石式なる型式名も設定されているが、新型式名の必要性にも疑問を抱く。中期初頭土器の範疇で把えることができると考えるからである。従って、私はⅡ段階については同じようにa・b・cと細分するが、内容は今村氏とはかなり異なっている。

以上の大きな2点を明らかにした上で、縄文系・沈線文系の各々の型式内容と連続・系統性を考え、さらに中葉土器群への変遷過程を探る。その上で最後に型式名について考えることにしたい。

IV 中期初頭土器群の変遷

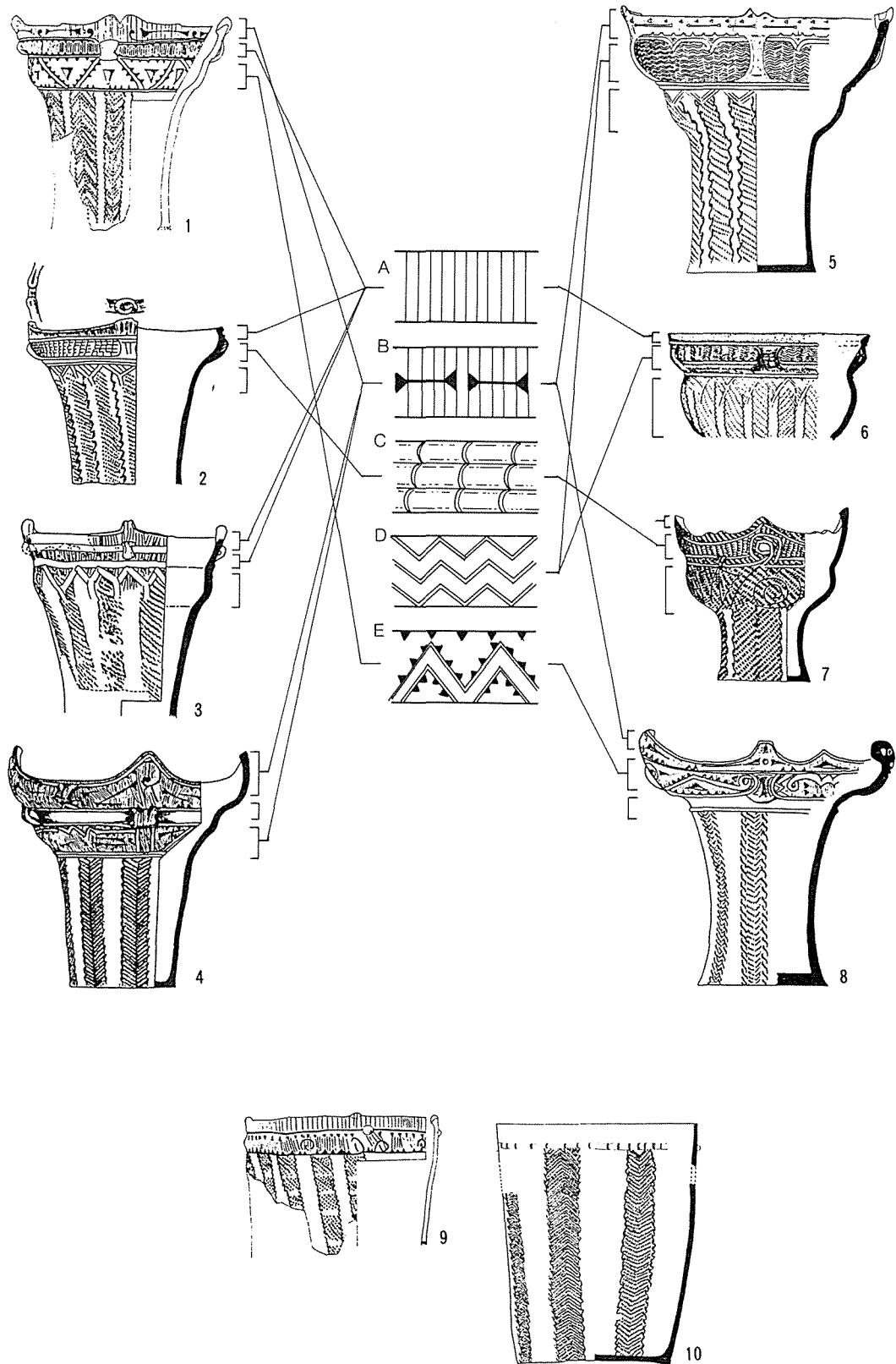
1 縄文系土器

器形にはいくつかのバラエティーがあるが特に今回は深鉢形土器に限り、その中でも全段階を通して最も安定した変遷を示し、主体となったキャリパー形と円筒形の2者を中心に考えたい。前者にはさらに口縁が平縁と波状縁の2種がある。

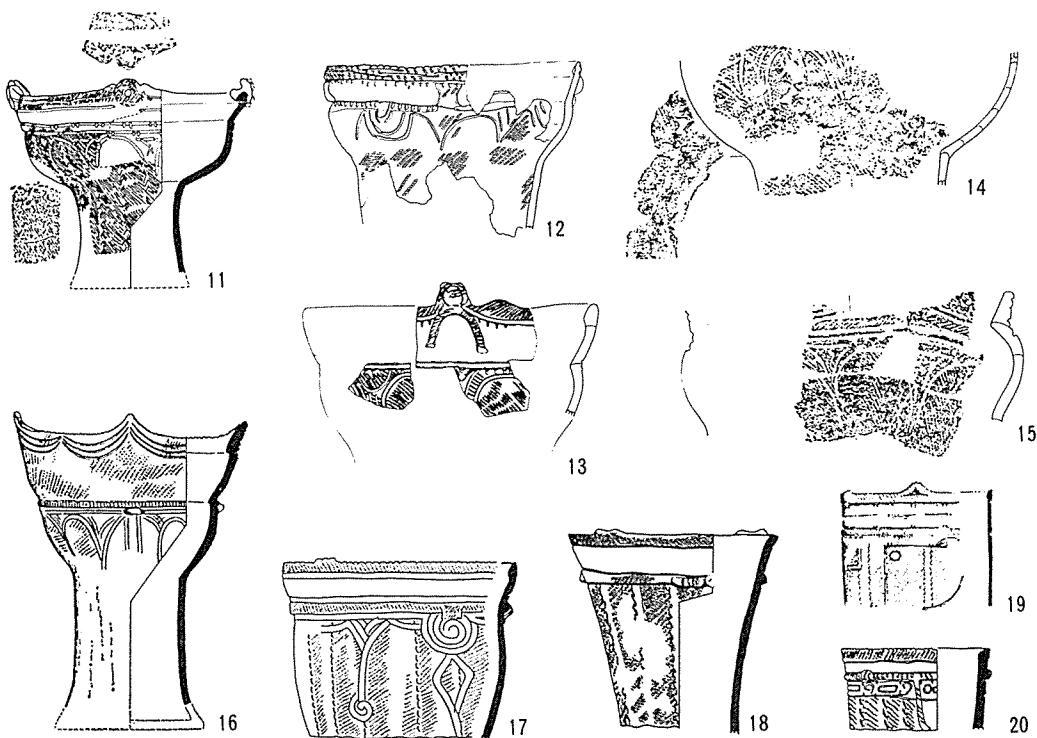
Ⅰ段階(第2図1~10) キャリパー形は、頸部の

くびれを境に、その上を口縁部、下を胴部とすると、口縁部は大きな弧を描くようにふくらむことが特徴で、それが3段となる場合も多い。胴部は底部にストレートにむかうものと、底部に対し、内反気味に張り出す2者がある。こうした形状から、文様帯は口縁部文様帯—第Ⅰ文様帯、胴部文様帯—第Ⅱ文様帯と大きく2分して理解することができる。口縁部文様帯はその形状に基づいてさらに3帯に細分され、それぞれを、I₁・I₂・I₃分帶と呼びたい。文様帯について補足しておきたい。このⅠ・Ⅱ文様帯間の区画は、必ずしも明瞭でない場合もある。つまり、器形のくびれに注目し、ここを境として両者を分けたが文様帯間の区画文のない場合が多いのである(3・5・6)。区画文という観点からすると、I₂分帶の下端には必ず横区画がされるので、ここを区切りとすべきかもしれないが、ここでは次の段階の文様帯のあり方から考えて、器形上の屈曲点をもって両文様帯の境としたい。このように規定される第Ⅰ文様帯内への文様施文は、模式図(第2図)で示したように、各分帶内へ大きくは5種の文様が、各々の個体に選択的に施文される。Aは櫛歯状工具による細線文、Bはそこに三角印刻文の組み込まれるもの、Cは爪形文を間隔をおいて連続的に施文する、いわゆる瓦状の押引き文、Dは竹管状工具による山形文、Eは大型の山形文に等間隔に三角列点文の配されるもの、である。それら5種の各細分帯内への厳格な施文規定はなかったようで、そのいずれかを選択し、いずれかの文様帯へ配することは製作者の意図に委ねられていたものと思われる。ただし、I₃分帶に、「V」字状または「Y」字状文の、横に連続して配される文様パターンは多いようである。また、4単位の橋状把手をもつことも第Ⅰ段階の特徴としてあげておきたい。第Ⅱ文様帯は一律に縄文となる。これは等間隔に空白部をもつ縦位帯状を特徴とし、縄文部は結節を伴う羽状縄文となる場合が多く、その左右両端は結節回転文により区画される。

波状口縁の土器も、概ね前記した一群と同じ構成を示す。円筒形土器は文字通り形状は筒形で変化が少ない。従って文様帯の区分も、縄文部とその上部という文様区画は、そのまま第Ⅰ文様帯、第Ⅱ文様帯とすることができます。第Ⅰ文様帯は1~



第2図 繩文系I段階



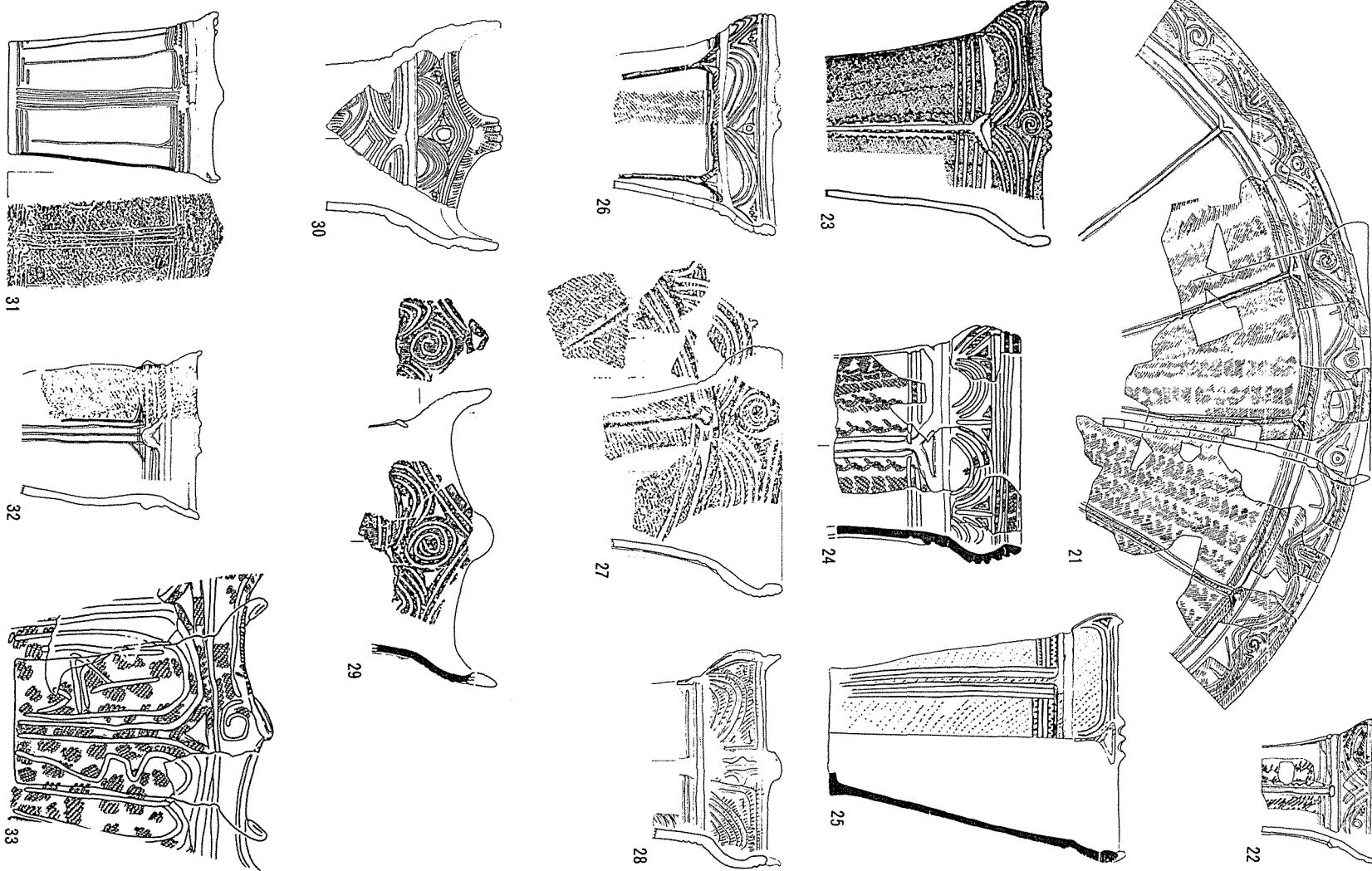
第3図 縄文系IIa段階

2帯に分帶され、その内部の文様要素はキャリバー形と同じである。また、第Ⅱ文様帶はやはり縄文で、施文方法も前者と同一といえる。

IIa段階(第3図11~20) 器形上での大きな変化はないが、量的に円筒形土器がやや多くなる。キャリバー形土器では文様帶についてもI段階と変わらない。第Ⅰ文様帶はやはり3分帶であるが、 I_2 分帶が狭まると共に一律に空白無文化し、 I_1 ・ I_3 分帶には縄文の施文されることが規則的となる。同時に、I段階で盛行した細線文等の文様要素の多くは極端に減少する。また、 I_3 分帶は広くなり、沈線による半円弧文により飾られる。これは、I段階にあった「V」または「Y」字状文が連続的に変化し、その上端で連結して簡略、大型化したものと考えられる。本段階から三角列点文が簡略化されたと思われる、沈線に沿った交互の鋸歯状刺突文や、刺突列点文が始まる。橋状把手はごく簡略化された形、あるいは単に突起といつてもさしつかえない程度となって残る。第Ⅱ文様帶では、縦位帶状に施されていた縄文は空白部がなくなり全面に展開されるようになる。結節縄文は残る。

円筒形土器においても文様帶のあり方は前段階と変わらない。文様は第Ⅰ文様帶で I_1 分帶—縄文、 I_2 分帶—無文というパターンが圧倒的で、第Ⅱ文様帶も結節縄文を伴う全面縄文であり、いずれもキャリバー形と同一の文様施文構成をとる。

IIb段階(第4図21~33) キャリバー形土器では、その形状が特に胴部において、底の張り出すものは少なくなり、ストレートに底部に収約される形となる。文様帶は、3分帶であった第Ⅰ文様帶は2分帶へと少分帶化される。それは、無文であった I_2 分帶の消失、ないしは I_3 分帶への統合と考える。というのは、 I_3 分帶にあった半円弧文が本段階には第Ⅰ文様帶の主文様として大型化し、横に広く展開するようになるからである。ここに文様の連続的变化と、文様帶の変化をみることができる。この半円弧文間には玉抱き三叉文をもち、半円弧文と横沈線文の接点には交互刺突文の施されるパターンも多い。第Ⅱ文様帶は、やはり全面縄文である。そして縦位隆帶文による「Y」字状文が現われ、第Ⅱ文様帶の縦位4単位の分割が意識されるようになった。



第4図 繩文系II b段階

以上のスタイルは、波状口縁の土器にもそのままあてはまる。

円筒形の土器では、口縁部がやや外反する形状となる。文様帶は、第Ⅰ文様帶の2分帶が1分帶へとやはり少分帯化し、統合される。第Ⅱ文様帶の上端「Y」字状縦位隆帶文による胴部4単位の分割や、第Ⅰ・Ⅱ文様帶の全面に展開される縄文施文は、キャリパー形と同じありかたを示す。

Ⅱc段階(第5・6図34~68) キャリパー形土器の器形の上での大きな変化はないが、文様構成上のバラエティーが増える。前段階までの変化の系統上にのる例が34~42であり、第Ⅰ文様帶モチーフの変化がよみとれる。前段階に沈線で描かれた半円弧文が、隆帶によって半円弧ないしは波状に表現されるようになり、中にはそれが重三角文となるものさえある(34・37・38・41)。これは、後に中葉期の土器の主要なモチーフとなり(三上 1986a)、その息の長い系統をたどることができる。三角区画帶間に玉抱き三叉文をもち、地文に縄文のある点に変わりはない。第Ⅱ文様帶では、やはり縦位4分割が上端「Y」字状縦位隆帶文によって行わ�るが、この「Y」字の上端部分が随分肥大化されているもの(36・42)のある点は見逃せない。地文にはやはり縄文が施される。波状口縁の土器(43・44)も構成は平縁と同じである。

キャリパー形土器のもう1つのバラエティーが、第5図の下段の45~51である。第Ⅰ文様帶にT字状文が密に入り、第Ⅱ文様帶にクランク状隆帶文が入る事を特徴としており、技法的には若干の連続押引文も使われる。これら的一群に対して、今村氏は大石式という型式を設定したわけであるが、共伴例等をみても、前記したキャリパー形土器に伴う場合も多く、積極的に分離する必要は認められない。むしろ、本段階内でのバラエティーとしておいた方がよいと考える。

円筒形土器は、口縁部の外反が強くなる。そして、文様帶およびモチーフの入り方により大きく3つのバラエティーを生じる。52~55は前段階の残影が最も強い。本段階では、断面カマボコ状の沈線による弧線文や、連続「Y」字状文が特徴となる。第Ⅰ文様帶は狭い。56~62は、第Ⅱ文様帶にキャリパー形土器にもみられた上端の肥大化した「Y」字状縦位隆帶文の入る一群でやはり4単

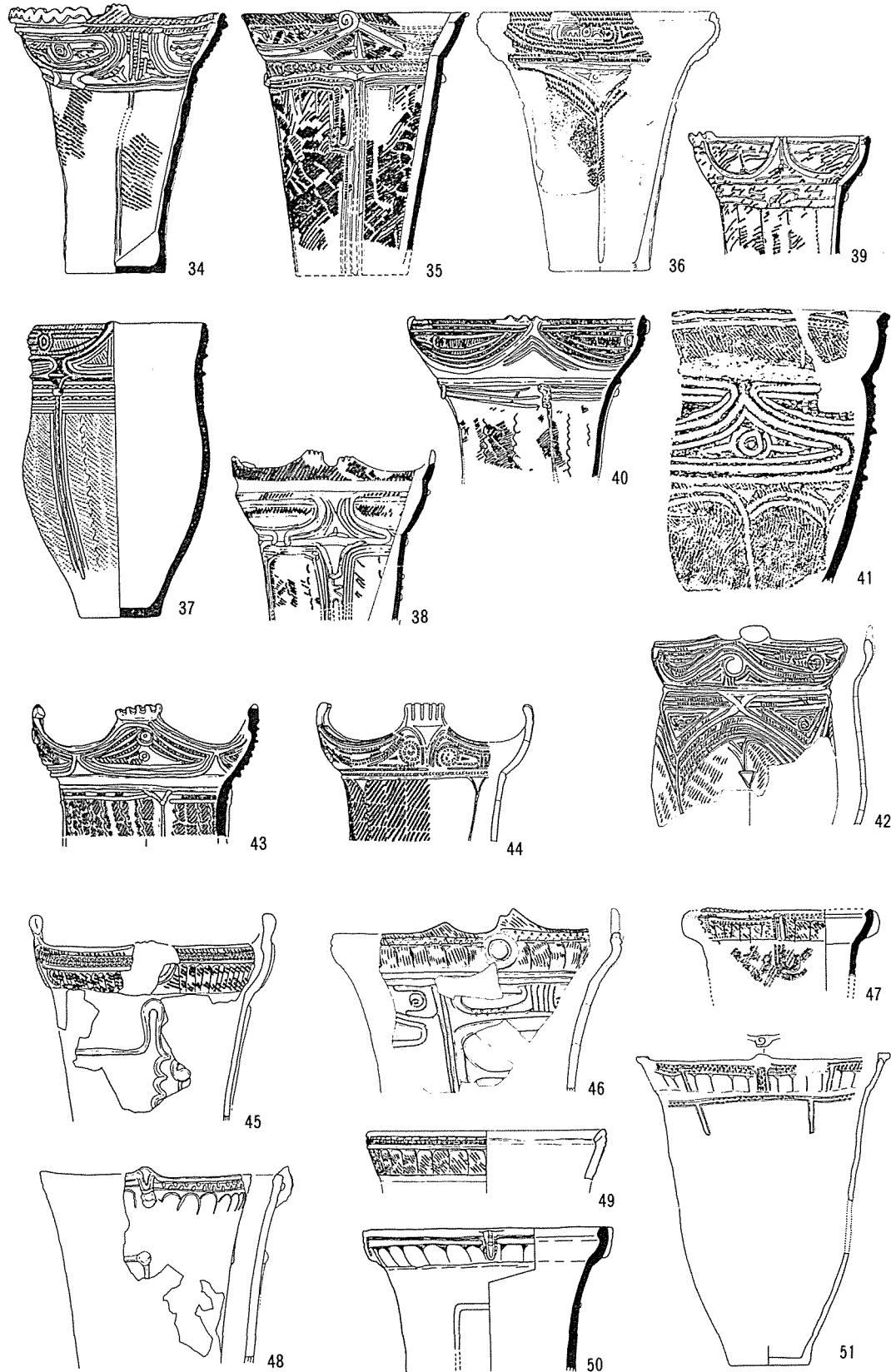
位の構成を示す。そして、63~68は第Ⅰ文様帶I₂分帶が広く、ここにキャリパー形土器にあった隆帶による大型の半円弧文や重三角文の入る一群である。第Ⅱ文様帶にはやはり上端の肥大化した「Y」字状縦位隆帶文もあり、本段階で共通のあり方を示す。

以上が縄文系土器群の中期初頭段階における流れである。それらは変化に一定の方向性をもち、やがてその終末には中期中葉土器へとつながる要素をもっていた。中期中葉期における最初の段階である貉沢式と呼ばれる型式が、中期初頭終末からどの部分がどのように移行してゆくのかについて、若干触れておきたい。ただ、今回は貉沢式の型式内容のすべてについて立ち入って触れることができない。従って、ここでは一連の流れにそつて貉沢段階と呼ぶことにしたい。

貉沢段階(第7図) 該期の土器研究は寺内隆夫氏による研究に詳しい(寺内 1984)。その成果を踏まえ、初頭・中葉という別や、移行過程について考えてみたい。

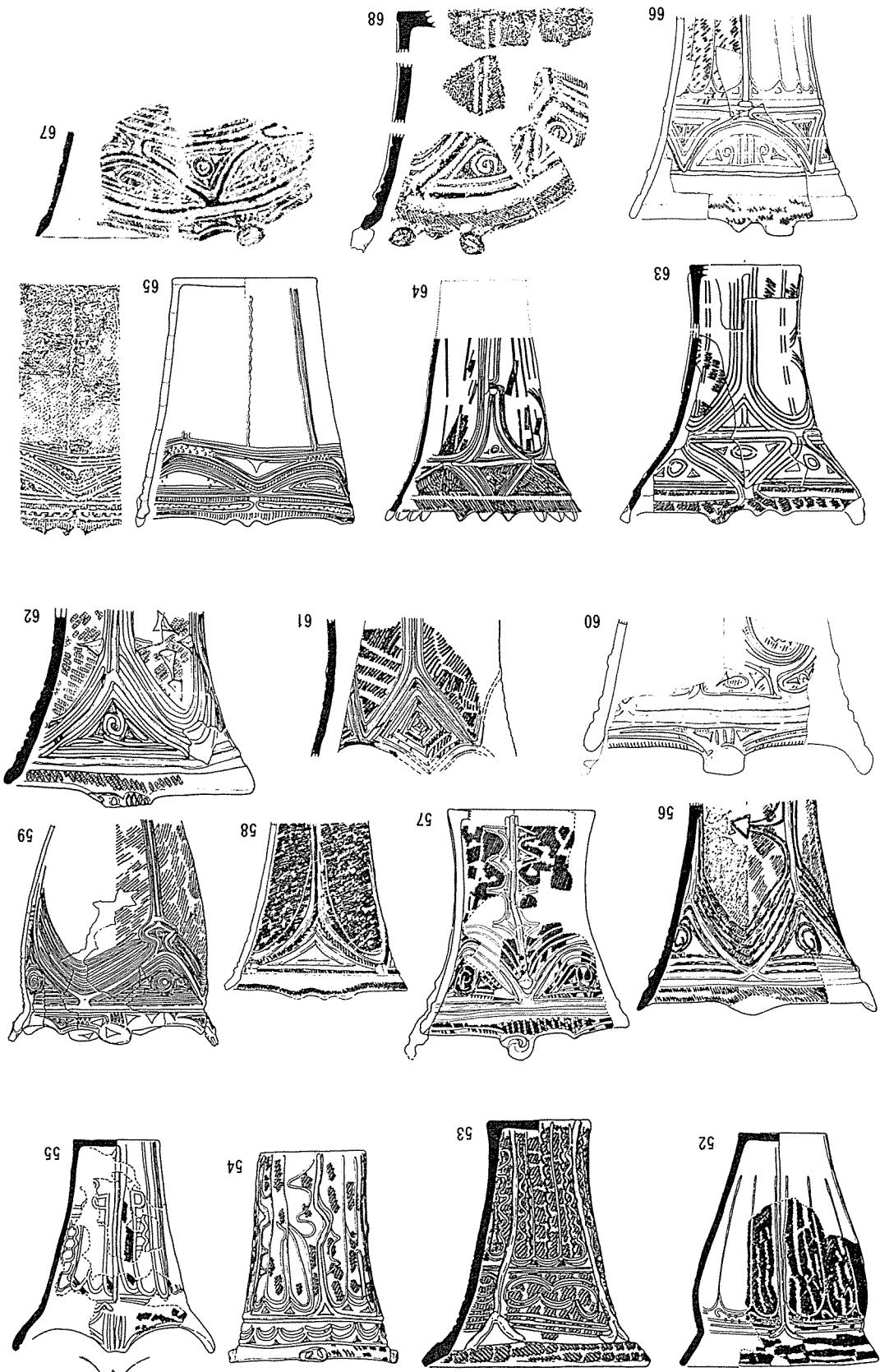
キャリパー形土器は、口縁部の文様の違いによりやはり大きく2分できる。1つは前段階に半円弧文や重弧文の入っていた一群で、それがこの期に重弧文として確立する。これは以後中期中葉土器の最も特徴的なモチーフの1つとなった。こうした初頭期の伝統を強く引く反面、総体としては大きく変化する。まず、縄文使用の激減があげられる。よって、この段階になるとすでに「縄文系」という表現はあてはまらなくなる。そして、あたかもそれに代わるかのように竹管状工具による角押文と、その連続施文が盛行することになった。モチーフでは橢円区画文が誕生し、器面を画するようになる。これは初頭期にあったクランク文が、その形を変えて連続的に変化した結果だといわれる。ただし、クランク文自体も若干残る(71・76)。この橢円文の流行はすさまじく、口縁部には重三角文よりもむしろ、そこに橢円文の入るものの方がこの時期に限っては多い。これらいくつかの要素の消滅や誕生が、土器型式において初頭・中葉を画する一つの画期たりうる所以となっている。

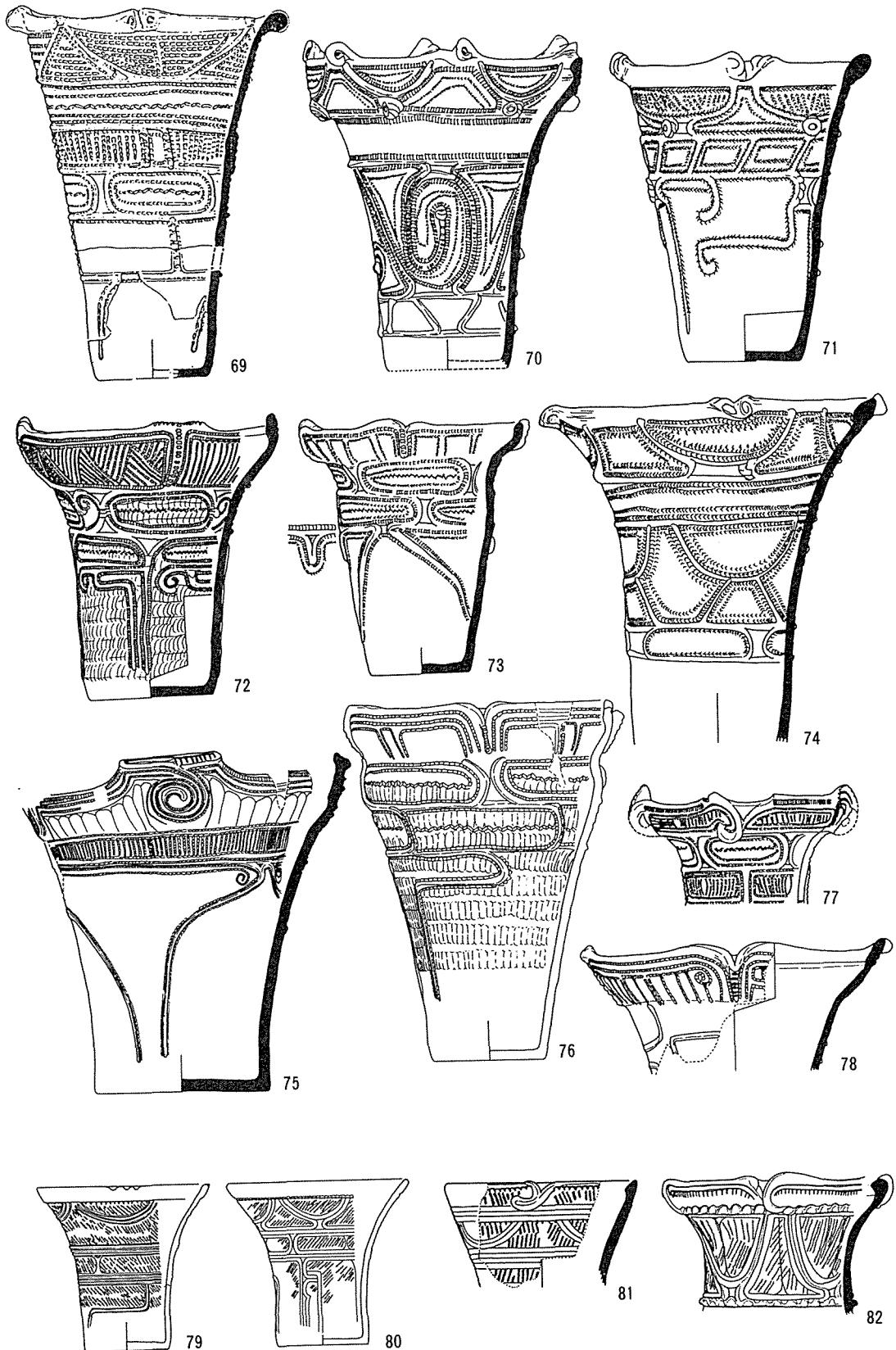
キャリパー形土器のもう1つ、Ⅱc段階にT字状文の入った一群は、それと同形のまま表出法が角押引文によってなされるようになる。胴部には



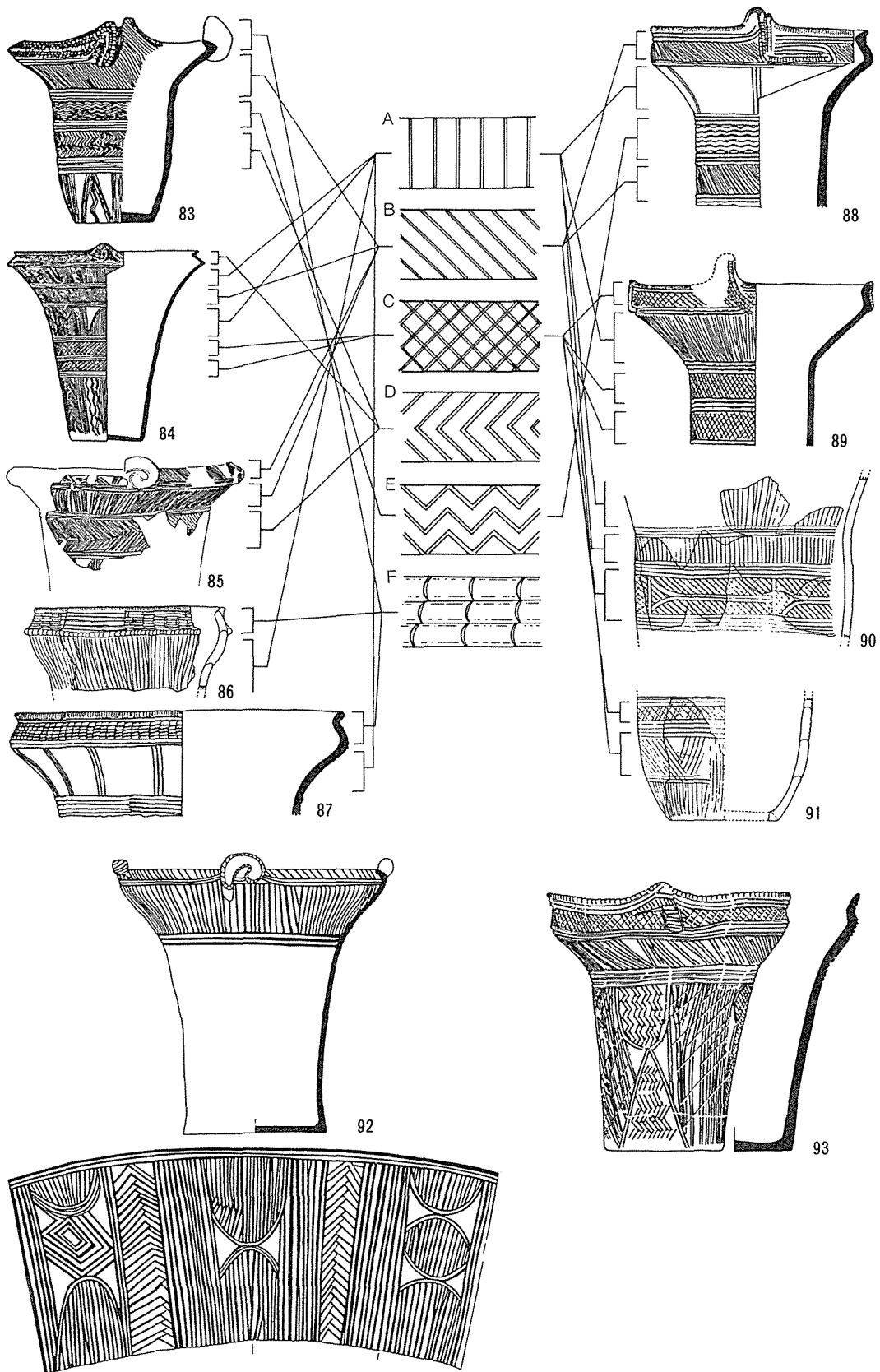
第5図 繩文系IIc段階(1)

第6图 铜文鼎IIc段階(2)

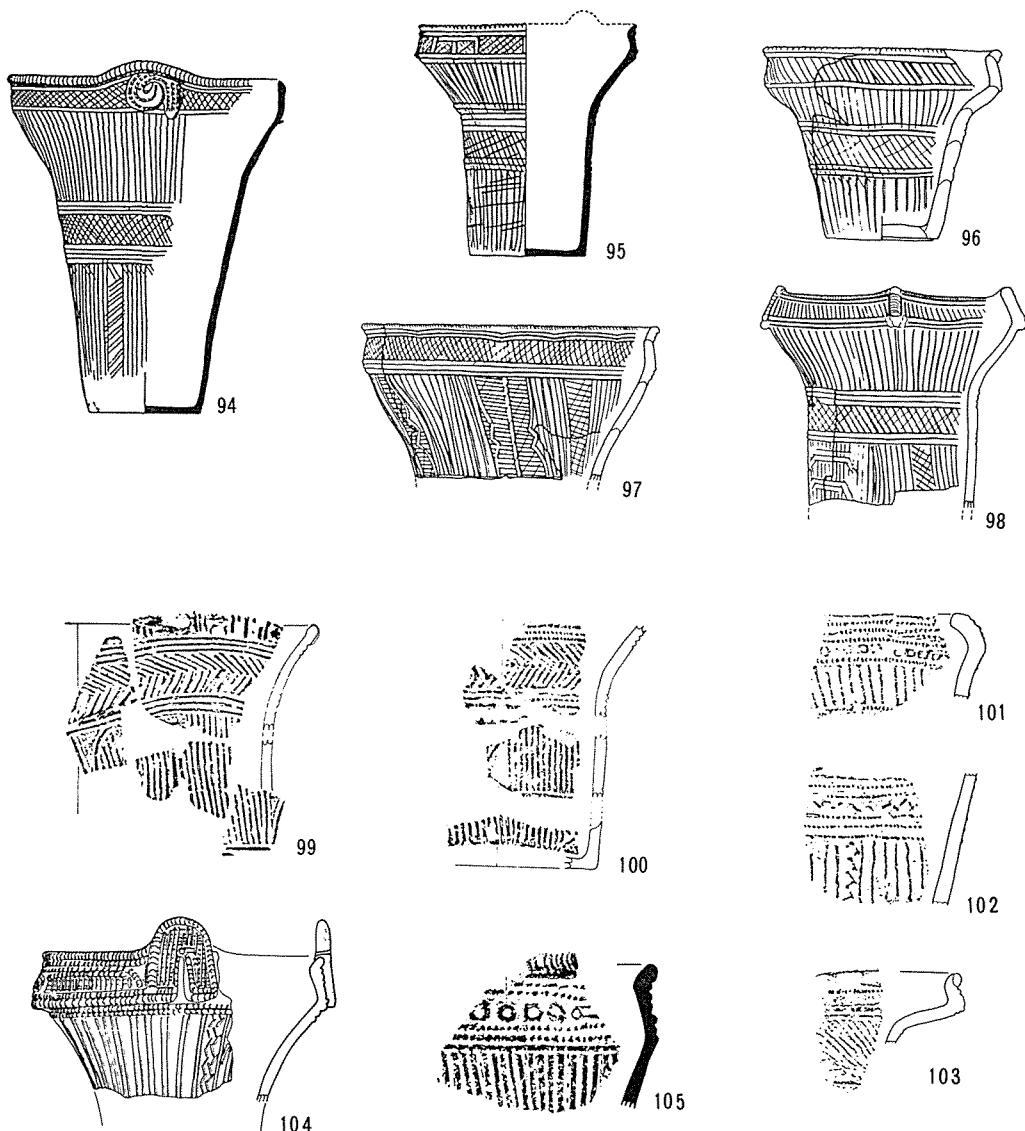




第7図 豚沢段階



第8図 沈線文系I段階



第9図 沈線文系 I・IIa段階

やはり楕円文やクランク状文が入る。

円筒形の土器についても、重三角文の確立化、楕円区画文の導入、クランク文の残影等、同様の変化を示す。ただ、縄文という要素が他ではほとんどなくなってしまうなかで、本器形に限ってわずかに残されたようである(79~82)。

以上が縄文系土器群の変遷である。それらは極めて連続的に変化し、やがて中葉土器群へとスムーズに移行していった。中部高地に顕著な中期中葉の華麗な土器群を生む確かな母胎となっていたのである。

2 沈線文系土器

藤森栄一氏により踊場遺跡のb類として分類された一群を中心とする(藤森 1934)。竹管状工具による平行沈線文を主たる文様要素に構成され、やがて平出第III類Aとされる土器に移行するとされるが、その間の型式推移について語られたことはない。そうした問題の解明も含め、その変遷をたどってみたい。ほとんどが深鉢形の土器であり、前期の末葉段階にはすでにその祖形ができていたと考えられる。

I段階(第8図83~93) 器形のうえでのバラエ

ティーは少ない。頸部を境として上半はラッパ状に大きく外反し、口縁部は「く」字状に内折する。その下半はストレートに底部に至る。文様帶もこうした器形の特徴を反映して、頸部から上位の第Ⅰ文様帶と、下位の第Ⅱ文様帶に分離できる。第Ⅰ文様帶は内折部分のI₁分帶と、頸部までのI₂分帶に2分でき、84のようにさらに細かく分かれるものも若干ある。第Ⅱ文様帶は3分帶と多帶に分かれるものと、1帶のみという2つのバラエティーがある。第Ⅱ文様帶が1帶のみの92・93はそれらがモチーフなどの面で前期末葉土器の流れを正統に継承した一群といえる(註4)。3分帶になるものは、第Ⅱ文様帶の上半にやや狭い等間隔のⅡ₁・Ⅱ₂の2帶構成を示す場合が多く、それ以上に分かれるものもまれにある(84)ように、細分帶化することが本段階の特徴といえるかもしれない。その場合通常Ⅱ₃分帶が最も広い分帶となる。

こうした各文様帶内に配される文様要素には、いくつかのバラエティーがある。いずれも半截竹管状工具による沈線文により、A—縦位、B—斜位、C—格子目、D—羽状、E—山形、F—瓦状押引、に構成される。こうした文様の文様帶内への配置は、本段階の縄文系土器同様必ずしも厳密な相関性はなく、上記の文様の範囲内から文様帶へ比較的自由な選択がなされたようである。ただ大雑把には、I₁分帶—格子目・斜位沈線・瓦状押引文 I₂分帶—斜位・縦位沈線 I₁・I₂分帶—格子目・山形沈線、となる場合が最も多い。そして、Ⅱ₃分帶ないしは第Ⅱ文様帶が分帶されないものについての第Ⅱ文様帶全体は、92のような「U」字と逆「U」字の組み合わせ状、ないしはダンゴ状とでもいえそうなモチーフを主文様としてもつ場合が多い(註4に同じ)。

他に本段階の特徴として、口唇部に爪形文の連續施文や、口縁部に一単位の渦巻状突起のつくことがあげられる。

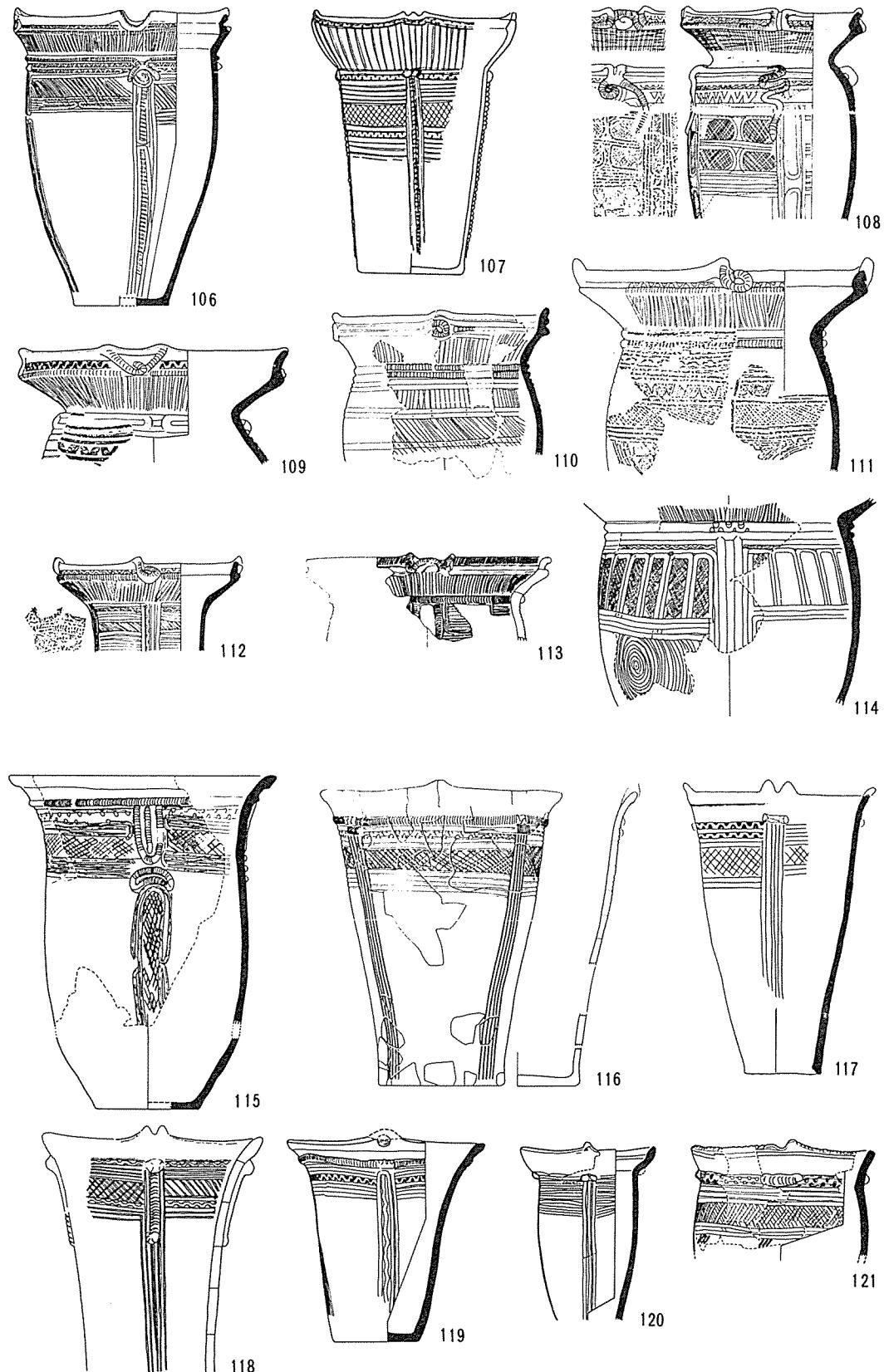
なお、本段階でも特に古い時期か、あるいは前期最終末に位置付けられそうな一群に注意したい。格子目ないしは縦位沈線文が沈線ではなく、細い粘土紐によって表現される一群である(第9図99~105)。さらに結節隆帯となっている部分(100~105)もあり、明らかに前期末葉段階の要素を備えている。これは本段階が、前期土器の流れにのって発

展している事実を示していることになろう。言葉を代えれば、中期の初頭である本段階の沈線文系土器は、前期からの伝統的な表現法である隆帯貼付と竹管状工具による結節施文が激減し、ほぼ一律に、まさに沈線文によって表現されるようになったことによって画期とされ、また象徴される段階といえるのである。

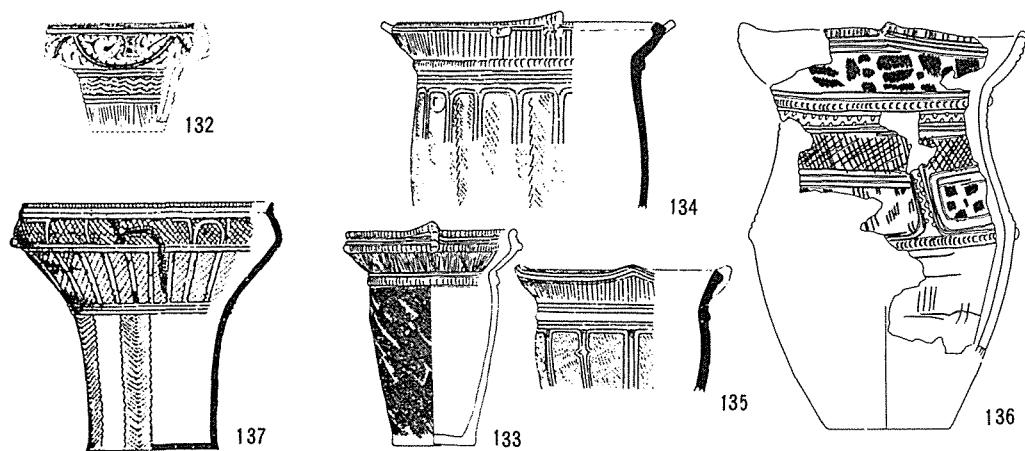
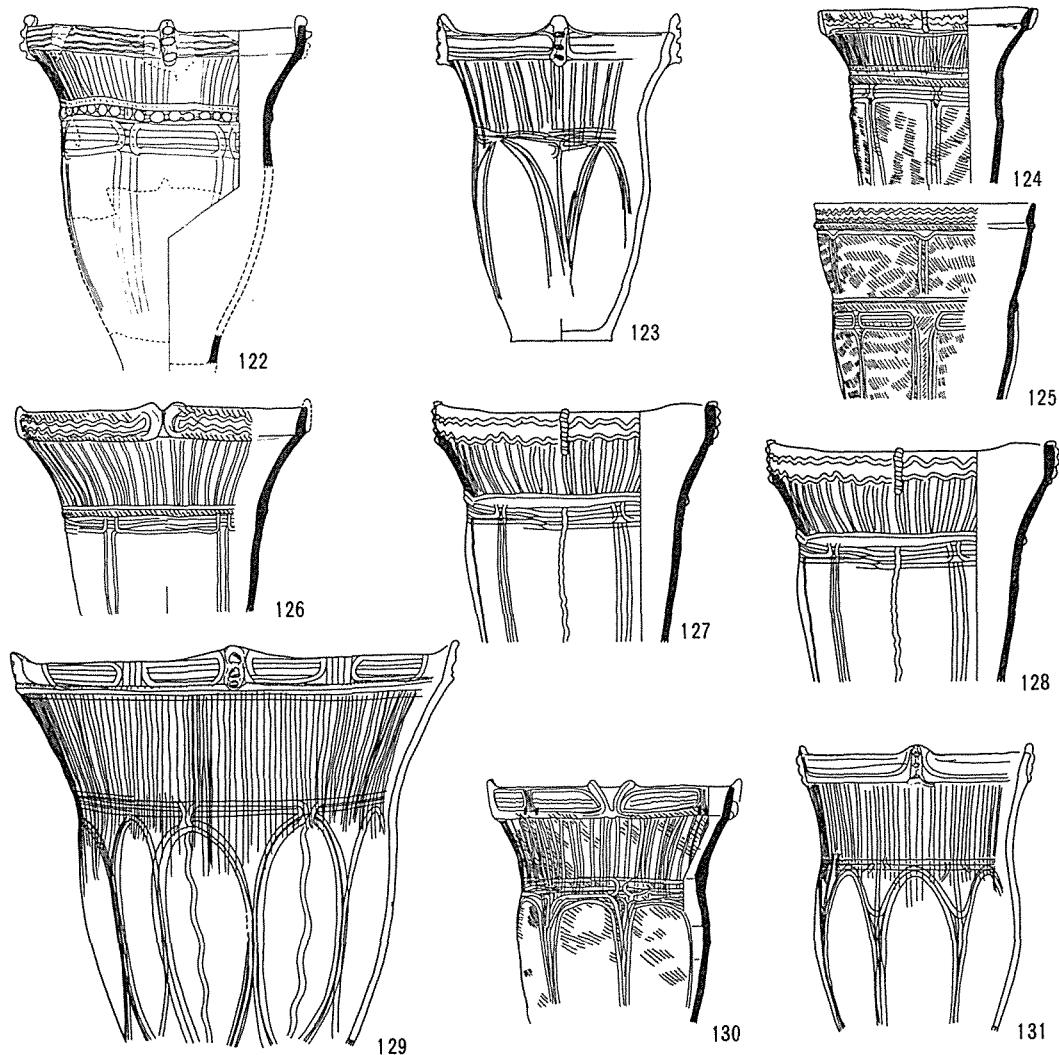
Ⅱa 段階(第9図94~98) 器形や文様要素において前段階と厳密に区別することはいささか困難といえる。しかし、文様帶の系統性という観点で本段階の区分が必要となる。それは第Ⅱ文様帶の3段以上の多段構成が減少し、Ⅱ₁・Ⅱ₂分帶という2分帶構成が確立することによる(註5)。このⅡ₁分帶に格子目文の入る割合が非常に高くなり、またⅡ₂分帶では、縦区画を促すかのような幅狭の縦位区画施文の存在(94など)する点も注意したい。こうした現象は、本段階を狭む前後の段階をつなぐ重要な一過程として位置付けられるのである。

Ⅱb・c 段階(第10図106~121) 縄文系にみられた細分はできない。器形では、口縁部の立ち上がりがやや短くなり、また胴部のふくらみも現れる。第Ⅰ文様帶ではI₁分帶がやや狭小化し、ここ主流となっていた斜格子目文がなくなる代わりに、交互刺突文が配される。ただしそれさえもないくらい幅狭なものもある。I₂分帶の縦位平行線文は依然続く。また、口縁部にあった突起は、渦巻き文や、2本の粘土紐により装飾的に作り出された形状へと簡略化される。第Ⅱ文様帶ではⅡ₁分帶のみがそのまま継承され、Ⅱ₂分帶は無文様化する。Ⅱ₁分帶のモチーフはやはり斜格子目文である場合が多く、この他には若干の斜線文や横平行線文・交互刺突文が加わる程度である。なお、この第Ⅱ文様帶には先にも触れたように、縦位にほぼ4分割する垂線が入る。詳しくみると、これは無文部であるⅡ₂分帶のみでなく、Ⅱ₁分帶をも通して分割する線となっている(模式図)。こうした胴部の4単位区画は、同期の縄文系土器にもみられた同じ様相であった。

深鉢形土器のもう1つのタイプとして、口縁部である第Ⅰ文様帶が狭く、口唇部がやや肥厚して作られ、無文となる一群がある(模式図下・115~121)。前者の簡略形とも言えようか。第Ⅱ文様帶の文様構成は、前者と全く同一である。こうした一群も



第10図 沈線文系II b・c段階



第11図 沈線文系猪沢段階(122~131)と折衷様的土器(132~137)

比率的には高い割合で存在する。

以上が本段階の特徴であるが、これらは山口氏によってF形態とされ(山口 1978)、今村氏のⅡb式に位置付けられたもの(今村 1985)に他ならない。そしてまさにこれら的一群こそ、山口・今村両氏もいうように、山内清男氏が五領ヶ台式土器として設定したと指摘されている一群である。しかし、今このようにその系統をたどってゆくと、これらはその系統の中のわずかな一時期を構成するいわば部分であるにすぎないことが理解できる。従って逆にここに示した系統が理解されるならば、五領ヶ台式の扱いについては自ずと再考がうながされるのである。このことは本論の目的に関わる問題でもあり、後章にて詳しく論ずることにしたい。

貉沢段階(第11図122~131) 器形は頸部上半の外反が弱くなり、口縁の折れも垂直に近くなる。第I文様帶はⅠ₂分帶がやや広がる。Ⅰ₁分帶には波状沈線文が入るが、これは前段階の交互刺突文のネガの部分が簡略的に変化し、沈線による波状に形を変えて表現されるようになったと考えられなくもない。また、口縁部にあった把手状の装飾は、単に1本ないしは2本の粘土紐を縦位に貼付するのみの形状となり、一層簡略化される。Ⅰ₂分帶の縦位の平行沈線文は相変わらず継承される。

第Ⅱ文様帶では、Ⅱ₁分帶の狭小化と共に、そこにあった格子目文や斜線文は極めて手の抜かれた表現となる。むしろⅡ₁分帶は形骸的に残ったというべきかもしれない。部分的に橢円形に区画される箇所もあるが、これはⅡ₂分帶との区画箇所と同じであり、その延長部にある。それは前段階にⅡ₁分帶をも縦に通して区画していた意識が、そのまま橢円状という、本段階に盛行するモチーフを応用する形で取り入れた結果と考えられる(模式図)。Ⅱ₂分帶はやはり縦位に区画されるが、その区画形は、縄文系土器のⅡc段階にみられた、上端の肥大化した「Y」字状モチーフが簡略化した形状を想定させる(123・129~131)。

以上の様相を特徴としてもつ土器は、従来「平出第Ⅲ類A」と称せられていた一群である。それらは踊場系の土器に由来するのではないかとされながらも、踊場式自体の編年的位置を含めて、その系統はいま一つ明確にされ得ていなかった。こ

こに改めてその可能性を示し得たと考える。

やがてこの平出第Ⅲ類A自体、その後何段階かの変遷をたどるようであるが(鶴飼 1977)、ここで示したものはその一番古いと考えられる一群である。その特徴は前記した通りであるが、その他にも例えば縄文の施文(124・125・130)もその1つとしてあげることができる。何故ならば、基本的に貉沢段階には縄文はほとんどなくなってしまうが、中期初頭Ⅱc段階の縄文系の影響がわずかに残ったと理解できるからである。

以上、沈線文系土器の型式内容と系統について触れてきた。それらは、その後半に位置付けられる本来の五領ヶ台式土器を含め、何段階かにわたって方向性ある変化を示し、やがて中葉の土器へと続いた。縄文系土器と共に、中期初頭の土器は極めて安定的に変遷していることが知れるのである。

次に、こうした縄文系・沈線文系と2つの系列の土器の、各時間帯内での併存・セット関係について触れておきたい。例えば、連続山形文であるとか胴部区画法であるといった個々の文様要素の共通・類似点については、本章中に触れてきた通りで、それが並行関係を知る1つの根拠となっているはずである。そして、両者の共伴関係については、先に梨久保遺跡の報文中にて触れてきた。ここではもう1つ、同時間内において互いの影響を受け合っていると思われる資料を検討することにより、一層両者の関係を裏付ける補強とした。

3 縄文系・沈線文系両要素をもつ土器

資料は決して多くはなく、若干みられる程度である。逆にそれだけ器形と文様との相関規制が強かつたといえるのかもしれない。

I段階 2点を示した。132は口縁部の細線文・三角列点文等から縄文系、胴部の連続山形文及び平行線文は沈線文系であり、頸部を境としてミックスされた形になっている。137はその逆である。Ⅰ₁分帶の斜格子目文、口唇部の爪形文、Ⅰ₂分帶の縦位平行沈線文という構成は、沈線文系土器そのものであるのに対し、胴部の帯状の縄文施文とその両端の結節回転文はいうまでもなく縄文系の要素である。また、両者ともに器形の形状も同じこ

とがいえる。132の口縁部の丸い内湾はやはり縄文系であり、胴部形状は沈線文系に同じである。137についても「く」字状に折れる口縁部形態は、沈線文系独自のものであり、底部の張り出し底となる形態は沈線文系にはない、縄文系の特徴であることは明らかである。

IIa 段階 133～135はいずれも口縁部沈線文系、胴部が縄文系となっている。

IIb・c 段階 136は全体的に縄文系の要素の強い中に、IIb分帯のみ沈線文系のモチーフが取り入れられたものと考えることができる。

以上が、特に目だった両者のいわば折衷的な土器である。これらの資料を含め、改めて縄文系・沈線文系とした両者の併行関係を検討すると、本章で述べた各々の段階における両者の共存については、ほぼ問題がないと考える。従って、従来考えられていた踊場式→梨久保式(五領ヶ台式)というような図式は、それが実は併行関係にあったことを再度明確にし、また従来の踊場式はいくつかの過程を経て平出第Ⅲ類Aに移行したことが明らかとなった。

それでは、中期初頭に存在する土器群が、縄文式土器編年の中にどう位置付くのか、以上の成果をふまえて検討し、まとめとしたい。

V 中期初頭土器群の再認識

中期初頭土器群を構成する主要な2系統の土器について述べ、各々の時間的な同時性、セット関係について触れた。そして最後にもう1点検討しなければならない課題がある。両者の空間的な広がりとその中心、それに基づく相異の有無についてである。

縄文系・沈線文系の両者が遺跡単位で共伴し、そうした組成を示す地域は、西関東から中部山岳地帯までの広汎なひろがりを示していることは先にも述べた(三上 1986b)。そしてこの広い地域の中での型式的な内容については、現在加速度的に増加している該期の資料を見渡しても、小地域単位で特徴を異にすると指摘できるデーターも少なく、またその必要性は認められていない。山口氏のいうように、要するに「既存の土器型式は内容的に共通する要素を多く含んでいる」(山口 1980)のである(註6)。それではその分布の中心領域の

問題はどうであろう。これは非常に難しい問題であるが、ただ、土器の変遷が型式学的に最も連続的にたどれる地域が、より安定的なその型式の保有地であったということだけは許されるのではなかろうか。その点からすれば、今回取り上げた資料の多くを出土する諏訪湖盆地から八ヶ岳西南麓にかけての中部高地は、その中心から大きくはずれる地域ではないと考える。一方、沈線文系土器は特に中部山岳地帯で根強く、西関東地方ではあっさり初頭段階で終わってしまい、中葉期にまでは残らなかった。本論のIIc段階に位置付けられた、本来の「五領ヶ台式」の型式としての存続は、前後のつながりを考えた時、大きな疑問符が打たれることになったのである(註7)。

さて、こうした以上の条件は、両系統の土器群が同一の型式名で呼ばれるべきであるという、必要かつ十分な内容を示しているに他ならない。そして、結論から先にいうと、それらを総称する名称は、「梨久保式」の名こそふさわしいと考える。その妥当性を理解するために再度、五領ヶ台式と梨久保式について触れておきたい。

1 五領ヶ台式土器について

本論に入る前にふれた2つの問題についてここで改めて考えたい。本来の五領ヶ台式土器以前にもう一型式が設定され、五領ヶ台I式とされたこと。そして、五領ヶ台式土器の系統に対する疑問。前者は今村氏の提唱、後者も氏によって細かく検討されている。従って、氏の考えを吟味し、本論の成果を加味することが、その問題を明らかにするために効果的と考える。

まずその五領ヶ台I式は、宮の原貝塚の第6層でまとまって出土し、第6群・第7群a類としたもので、「今まで関東地方では良くその存在が知られていなかった型式の土器で」(今村 1972)あった。これらは層位的、型式的に「十三菩台式と五領ヶ台式の間隙を埋める新型式として『宮の原式』の設定が考えられる」(同)としながらも、種々の事情を考慮して、五領ヶ台I式としたという経緯が知られる。しかし、さらに中部地方との対比に触れ、「五領ヶ台I式はほぼ梨久保式に、五領ヶ台II式はほぼ神殿・唐沢式と呼ばれるものに対応するようである」(同)という記述がある。そして

「中部地方の五領ヶ台式は、西関東のそれに似すぎている」(今村 1985)といい、横浜市中駒の資料について「長野県の梨久保式や踊場式によく似ているが、関東地方の編年の中にはぴったりと該当する型式が無い」(今村 1985)という。この2者の記述は矛盾するが、いずれにせよここでえて宮の原式を想定し、五領ヶ台I式を設定した意義が非常な疑問となる。氏自身もいう梨久保式でよかつたはずである。事実、昭和26年に設定された梨久保式土器の中には、今村氏が五領ヶ台I式として呈示した土器の大方は含まれている。そもそも、五領ヶ台式土器とは、今村氏が、八幡一郎・三森定男両氏の資料を自身で実見した結果、「当初の五領ヶ台式が、主にII式をさしていたことは明らか」(今村 1985)なはずであった。

次に問題となるII式であるが、3細分された各々の系統觀や型式内容について、不透明な部分が多い。今村氏の用いた資料(今村 1985)をその年代順に並べるとそれがより具体的になる。IIa式はほとんど縄文系の土器であるのに対し、IIb式は沈線文系とした土器がほとんどで、IIc式では再び縄文系が大半を占め沈線文系は全くない。要するに縄文系と沈線文系の土器が交互に出現するという系統を語る。この系統觀の中では、氏がいう「五領ヶ台系」とは一体何であるのかという本質が見えなくなる。この点についてさらに具体的に指摘すると、五領ヶ台IIb式こそ「本来の五領ヶ台式は大体この型式をさしたもの」(今村 1985)と考える今村氏が、この土器についてもう一方では「系統的には踊場系の強い影響を受けており、五領ヶ台式の系統と、踊場式の系統の融合によって成立した型式といってよい」(同)という矛盾した記述を行い、五領ヶ台式の本質と系統をわからなくなる。ならば「五領ヶ台式の系統」とは一体何を示すのかということである。その系統がそれ以前にたどれるとしたらそれはI式であるが、そのI式は「梨久保式に対応する」土器として前述した通り今村氏が昭和47年に設定した土器型式なのである。だとすれば昭和26年に提唱された「梨久保式土器」の内容こそ十分に消化された上で使われることが型式設定の常であったはずである。

さらに、そもそもこの「本来の五領ヶ台式土器」とされるIIb式土器は、今村氏も「踊場式の系統

の融合」のあったことを想定しているように、私のいう沈線文系後半の土器である。そして、この沈線文系土器は、昭和9年に藤森栄一氏によってまとめられた踊場b類土器(藤森 1934)にその系統を発するものであることが明らかとなった。従って、本論で示した系統觀が有効なものであれば、五領ヶ台式はその存在すら危ぶまれる事態となるのである(註8)。

2 梨久保式土器の再認識

梨久保遺跡出土の中期初頭土器がいかなる内容を持っていたか、そして、それらが研究史的にはどう扱われてきたかについては、梨久保遺跡の報文中にて触れたように本論の第IV章の内容とほぼ一致し、また研究史的には梨久保式設定時に縄文・沈線文両系統の土器を明確に認識し設定されている事実(戸沢 1951)に改めて注目すべきで、資料的実態もそれに矛盾していないことを知った。要するに該期の土器は器形と文様の相関性が非常に強く、その規制の中で作られていたのである(註9)。

そもそも中期初頭土器研究の混乱はこの2者、すなわち梨久保式における縄文系・沈線文系土器という関係の不透明さからきている。「前中期から中期初頭にかけての編年は、ある程度の体裁を整えたかにみえるが、その中心となる諏訪湖岸の土器型式の編年序列が、そのまま時間的経過を示すものとは限らないという編年研究としては最大の問題点が残されている」(松村 1974)という指摘にも明らかで、その後沈線文系と縄文系の編年をめぐっていくつかの論攻が出されたが、両者の併存を説く積極的な意見は少なかった。踊場式の名は梨久保式以前の型式として根強いのであるが、その根拠はほとんどなかつたし、そもそも踊場式は1つの型式として時間的にも空間的にもそれだけで独立して存在することはないのである。このように、踊場の土器を含めて設定された梨久保式土器は、その理解が至らぬままその一部を構成する踊場の土器とそれ以外の土器の扱いをめぐって混乱し、それが拡大してしまったのである。そして、中期初頭でも後半期の一部に対しては確かに唐沢式など新たな追加もあったが、これはむしろ梨久保式の後半の形として理解しておいた方が本

論中でも述べたように、型式学的にもスムーズである。戸沢氏自身、本論のⅡc段階に相当する長野県岡谷市原沢遺跡の資料(37)に対し「縄文時代中期初頭という時期をめぐる、土器編年学的研究の上で考古学的には重要な資料」であるとし、これを改めて「梨久保式」と認識されている(戸沢 1973)、また同じ様相の土器に対して藤森氏も「梨久保式最後の姿」(藤森 1966)とするべきだという発言を行っている。こうした後半の土器を含めることによって、中期初頭全般の土器はすべて梨久保式土器としてそろってくるのである。

以上、冗長に中期初頭の土器を縄文系・沈線文系と分け、その系統性、共存関係等について述べ、その在り方は梨久保式土器が設定された時点における型式觀が、資料の豊富となった現在も、中期初頭土器全般を指す概念として、最も適切な内容と意義を含んでいたことを改めて知ることができた。そして、かつて「鶴の土器」と呼ばれた一群は、まぎれもなく以後中葉期に隆盛を迎えた「井

戸尻文化」の一翼を担った華麗な土器の確かな礎となっていたのである。つまり中部山岳地帯では、例えば平出第Ⅲ類A土器に代表される西関東地方には全くない土器の存続にも現れているように、中期初頭土器群の伝統が根強く継がれ、それが強力な地域色となって独自の文化を築いてゆくことになったと考えたい。最後にここに再度縄文時代中期初頭に中部・西関東地方に分布を持つ土器の、編年的に最もふさわしい型式として「梨久保式土器」の名を提唱して本稿をとじることにしたい。

本論は、本文中でも触れた通り岡谷市梨久保遺跡の報告書をまとめる中から疑問に感じたことについて追求したことまとめたものである、報告書作成当初より多くの方々より種々の有益な助言や指導をうけることができた。戸沢充則・樋口昇一・会田進・長崎元広・唐木孝雄・寺内隆夫各氏や明記しないが学恩をうけた多くの方々に深く感謝する次第である。

註1 中期初頭土器の研究には山口明氏の業績(山口 1978・1980)も大きいが、型式名には慎重で、あまり触れられていない。少なくとも特に五領ヶ台式については後述するように、ごく限られたものに適用するに止どめられており、五領ヶ台式を拡大して解釈した今村氏とは対照的である。

註2 今村氏は、宮の原貝塚のデーターでこの踊場に類似する土器を5群a類と分類し、五領ヶ台I式とした6群よりも層位的には「先行している可能性を示している」(今村 1972)とした。しかし、そのデーターを見る限りごく少量5群a類が確かに下層より出土しているものもあるが、ほとんどは6群と同一層中より出土しており、氏自身も懸念するように「むしろ五領ヶ台I式に近い」(同)のではないかと考える。最近、その両者が併行するものではないかとする考えが、ようやく出始めている(今村 1974、能登 1981)。

註3 宮坂光昭氏(宮坂 1965)や藤森栄一氏(藤森 1966)により、古くから指摘されていた。

註4 この間の詳しい型式推移については、諸磯C式→晴ヶ峰式→梨久保式にかけての系統的な変化として触れてある(三上 1987)。

註5 山口氏も多段のものをより古く位置付けている(山口 1978)。

註6 ただし、縄文系・沈線文系両者の共伴の比率には少ながらぬ違いがある。これは地域単位、さらには遺跡単位でさえ両者の比率に相異のあることは事実で、このことは今後の課題とされなければならない。

註7 「中部高地を本拠地とする踊場式土器」(今村 1985)、「細綱文土器群は関東を中心に、そして、集合沈線文土器群は比較的中部地方に偏在する傾向を示している」(能登 1981)。本来の五領ヶ台式が、筆者の考えるよう沈線文系(踊場式)後半にあたるものであれば、本来ならば上記のように考える研究者は、その中心地にあたる型式名を冠することがふさわしいと考えるべきで、五領ヶ台式を使うことが矛盾となる。

註8 遺跡での在り方は、先にも記したように縄文系と沈線文系土器がセットになって出土する例が増加している。従つて、両者を総称する型式名称に苦慮する傾向が現われ始めた。例えば、一軒の住居から出土する中期初頭土器の説明に際して、「五領ヶ台式土器は本来集合沈線文系を含まないものと考えるが……中略……この土器もあえて含めて説明する。」(小野 1986)といわざるを得ない状況を生んでいる。その一部を示すにとどまる五領ヶ台式という名称では、中期初頭土器を総括する型式名としてはもはや不完全で、実態に対応でき得ないという矛盾さえおこしているのである。

註9 縄文時代中期中葉の土器にもこうした現象が厳然と存在することを述べたことがある(三上 1986a)。

図版掲載土器出土遺跡一覧表（数字のみは住居址、土は土壤、Pはピット）

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	東京 明神社北	47	長野 船塁社11	93	長野 大洞
2	神奈川 宮の原	48	長野 梨久保84	94	長野 籠畠10
3	長野 大石 土855	49	東京 倉田Ⅳ	95	神奈川 宮の原
4	神奈川 宮の原	50	長野 大石18	96	長野 高見原
5	長野 梨久保	51	長野 雨堀	97	長野 高見原
6	長野 梨久保	52	長野 大石 土435	98	長野 高見原
7	神奈川 宮の原	53	長野 頭殿沢14	99	東京 小山田12
8	長野 籠畠	54	長野 頭殿沢14	100	東京 小山田12
9	東京 明神社北	55	長野 大石 土429	101	長野 高風呂
10	長野 羽場下2	56	長野 大石 土587	102	長野 高風呂
11	長野 大石 土201	57	長野 大石 土587	103	長野 高風呂
12	長野 梨久保 495P	58	山梨 机腰	104	長野 梨久保 394P
13	東京 倉田Ⅳ15	59	東京 前田耕地	105	長野 瑠璃寺前
14	神奈川 京王帝都相模原線	60	東京 神谷原	106	長野 大石1
15	神奈川 尾崎	61	長野 船塁社 土11	107	長野 曾利 土14
16	長野 九兵衛尾根	62	長野 頭殿沢10	108	長野 大石1
17	神奈川 宮の原	63	長野 頭殿沢10	109	長野 大石1
18	神奈川 宮の原	64	長野 竹之城原	110	長野 大石30
19	長野 梨久保	65	東京 武藏J地区	111	長野 大石1
20	神奈川 宮の原	66	長野 雨堀	112	長野 大石1
21	長野 雨堀	67	山梨 下向山	113	東京 倉田Ⅳ
22	長野 雨堀	68	長野 曾利134	114	長野 大石28
23	長野 曾利57	69	長野 頭殿沢9	115	長野 大石28
24	長野 頭殿沢 土184	70	長野 大石15	116	東京 武藏J地区
25	山梨 下向山	71	長野 大石2	117	山梨 下向山
26	東京 神谷原 土27	72	長野 大石15	118	神奈川 山之台
27	神奈川 山之台	73	長野 大石3	119	長野 大石1
28	東京 神谷原113	74	長野 大石3	120	長野 大石 土485
29	長野 頭殿沢	75	長野 大石38	121	長野 大石 土1157
30	東京 神谷原	76	長野 大石21	122	長野 大石 土890
31	東京 武藏J地区	77	長野 大石14	123	長野 北丘B
32	東京 神谷原 土31	78	長野 大石14	124	長野 大石3
33	長野 頭殿沢 土182	79	長野 荒神山77	125	長野 大石3
34	長野 船塁社11	80	長野 荒神山77	126	長野 大石3
35	長野 船塁社1	81	長野 大石25	127	長野 大石15
36	長野 高部13	82	長野 植口内城9	128	長野 大石15
37	長野 原沢	83	長野 籠畠10	129	長野 荒神山49
38	長野 船塁社14	84	長野 広畠	130	長野 大石13
39	長野 船塁社1	85	長野 梨久保	131	長野 荒神山49
40	長野 船塁社10	86	長野 高見原1	132	東京 神明社北
41	長野 曾利42	87	神奈川 宮の原	133	山梨 上平出
42	長野 頭殿沢11	88	神奈川 宮の原	134	長野 月見松
43	神奈川 山之台	89	神奈川 宮の原	135	長野 月見松
44	東京 神谷原 土30	90	長野 高見原1	136	長野 梨久保
45	長野 梨久保97	91	長野 高見原1		
46	東京 神谷原113	92	長野 羽場下2		

引用参考文献

- イ 池谷信之・山下正博 1981 「秦野市山之台遺跡出土の土器と石器」小田原考古学研究会会報第10号
- 今 村 啓 爾 1972 「前期末～中期初頭の土器編年について」『宮の原貝塚』
- 1974 「登計原遺跡の縄文前期末の土器と十三苦台式土器細分の試み」『とけっぱら遺跡』
- 1985 「五領ヶ台式土器の編年」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第4号
- ウ 鵜 飼 幸 雄 1977 「平出Ⅲ類A土器の編年的位置づけとその社会的背景」信濃29—4
- エ 江 坂 輝 弥 1949 「相模五領ヶ台貝塚調査報告」考古学集刊第3冊
- オ 小 野 正 文 1986 「第5章 縄文時代中期」『糸迦堂1』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集
- テ 寺 内 隆 夫 1984 「角押文を多用する土器群について」下総考古学7
- ト 戸沢充則・宮坂光昭 1951 「長地村梨久保遺跡調査報告」諏訪考古学7
- 戸 沢 充 則 1953 「諏訪湖周辺の中期初頭縄文式遺跡」信濃5—5
- 1973 「原始・古代の岡谷」『岡谷市史上巻』
- 1984 「藤森栄一論」「縄文文化の研究10』
- ノ 能 登 健 1981 「五領ヶ台式土器」「縄文土器大成2」
- フ 藤 森 栄 一 1934 「信濃上諏訪町踊場の土器」人類学雑誌49—10
- 1935 「古式縄紋土器の終末と厚手土器の進展」考古学評論第1巻第2号
- 1956 「中部・複雑な中期縄文式土器とその消長」日本考古学講座3
- 1966 「中部高地の中期初頭縄文式土器」富士国立公園博物館研究報告16
- マ 松 村 恵 司 1974 「縄文時代中期初頭土器研究史」史館第3号
- ミ 三 上 徹 也 1986 a 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」長野県考古学会誌51号
- 1986 b 「縄文時代中期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』
- 1987 「第4章 大洞遺跡5—(1)前期末葉～中期初頭土器の編年」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1」
- 宮 坂 光 昭 1965 「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査」長野県考古学会誌3号
- ヤ 山 口 明 1978 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」駿台史学第43号
- 1980 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」「縄文土器の交流とその背景」静岡県考古学会シンポジューム4
- 山 内 清 男 1936 「日本考古学の秩序」ミネルヴァ1巻4号
- 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学1巻1号

(本稿を草するに際し資料として用いた報告書については割愛した。御寛容いただきたい。)